



# ラッキーナスビ2.5



## 社会と学校がつながった!!



▲職場体験学習の翌日、研究をまとめる生徒たち

### 《自分》が変わったよ

#### 『職場体験』が『経験』へ

#### 《仮説》を検証する学習

職場体験学習に行く前、2年生は「職場研究」を行った。バリュープロポジションキャンパスとビジネスモデルキャンパスを使いながら、体験する仕事を分析した。どんな構成になっているのか、どんなニーズに応えようとしているのか等々、「こういう仕事ではないだろうか?」という仮説をつくりあげた。そして、その《仮説》がどの程度、現実を説明できているのか、職場で学んだことをもとに検証していった。生徒たちは《仮説》が変容していく経験を積んでいた。

### 《社会》と《学校》をつなぐ

中学生がよく口にする言葉がある。「こんな勉強して、何になるの?」「今やっていることが将来にどう役立つの?」という言葉である。この言葉には、「学校で学んでいることが、実は社会では役立たないのではないか」という、少しだけ(…ではないかも?)疑ってみたい気持ちも含まれているのではないだろうか。このような疑問を投げかけられた大人たちは、きつこう言う。「いつか、役に立つよ。たぶん…ね!」

生徒たちは、研究をまとめながら「社会と学校とのつながり」を考えた。学校で学んだことが、社会(職場)でどう役立ったのか。社会(職場)で学んだことが、学校でどう役立てられそうなのかを考えた。

この2つの問いは、生徒たちが「学校での学び」を捉え直すきっかけになるのかもしれない。いや、そうなってほしい。

学校で学んだことを社会のなかで、自分自身でどうにかして役立てていく力をつけていきたい。だから「勉強して、ハイ、終わり」ではなく、「今日勉強したことは他教科で、生活のなかで、部活動で、習い事で、どうやって役立てることができるかな?」こんな問いを自分自身に向ける習慣を身につけていきたい。

「どんなふうに役立ちますか?」と問うのではなく、「どうやったら役立てられるだろうか?」と問ってみよう。そうすると、問いに答えるのは先生や親ではなく、自分自身になる。自分が学んだ内容に、自分で問いを投げかけてみよう。

新しいことを学んだら、「これはどんな場面、どんなふうに関わることができるだろう?」と、自分自身に問いかけてみよう。

この《ナスビの売り方》はいかがですか?

## イノベーションから生まれた『ミスペディア』『ナスペディア』



あるとき、3年生の○○○さんが教えてくれた。「ウイキペディアとナスビの売り方を掛け合わせて『ナスペディア』をつくったらどうですか?そうすれば、誰かが考えたアイデアにみんながアクセスできるようにしますよ!」

このアイデアは、職場体験を通して見つけた「ナスビの売り方」をまとめた『ナスペディア』、職場での失敗(ミス)と改善策をまとめた『ミスペディア』を生み出すことになった。

「新結合」とも訳されるイノベーションそのものだ。

生徒たちのアイデアで学校がさらに良くなっていく。その典型的な事例ではないだろうか。誰かが生み出したアイデアが、社会を大きく変えることがある。そんな経験を積むことができるほど、学校を卒業し、社会に飛び出したあとのキャリアも広がっていくのではないだろうか。

○○さん、ありがとうございます。○○さんのアイデアのおかげで職場体験学習がさらに深い「経験」になりました。みなさんもアイデアが思いついたら、どんな提案してみてください。